



るうてる

箱崎群教会共同体版

一月報 メッセージ
と証しー

発行 日本福音ルーテル箱崎教会

代表者 牧師 和田 憲明

〒812-0053 福岡市東区箱崎 3-32-3

T E L (092) 641-5440 / F A X (092) 641-5480

箱崎教会・恵泉幼稚園 <http://www.jelc.or.jp/hakozaki>

聖ペテロ教会・

奈多愛育園・るうてる愛育園 <https://aiikuen.net/>

CLICK

教会の クリスマス 12/25-1/6

今日ダビデの町で、あなたがたのために
救い主がお生まれになった。 ルカ2:11

教会は
アドベントクランツの
ロウソクに火が灯され
クリスマスを迎えます

ルーテル教会の
クリスマス期間は
12月25日から1月6
日(顕現日)までです

はなれることが
思いやりとなった世界に
いっしょにいるよと
あかちゃんイエスさまが
ほほえんでいます

「本当」のクリスマスに
こころをあわせましょう

【produce by / jun MATSUMOTO】

★12月24日(金) in 箱崎教会 ※12月3日時点の予定、更新はHPに

クリスマス・イブ礼拝 入れ替え2部制 基本的に以下のとおりです

① 17:30~18:00 恵泉幼稚園関係者向け(在園・卒園生)

② 19:00~19:45 一般・教会員向け【YouTubeライブ配信／QRコード】

いずれも、予約不要・参加費無料



教会は 新型コロナウイルス感染防止対策を講じております 暖房をかけながら換気をしますので マスク着用や暖かい服装調整などを備えてお越しください



★2022 年 1 月 2 日 (日) in 箱崎教会

新年・主の顕現主日聖餐礼拝 10 時 30 分～11 時 30 分 礼拝堂

新しい年は 教会からはじめませんか 一年のはじまりに 祝福を

※ 1 月 1 日 (元旦・土) 礼拝はございませんので、ご注意ください

しかし、あなたがたは、起ころうとしているこれらすべてのことから逃れて、
人の子の前に立つことができるように、いつも目を覚まして祈りなさい。」
(ルカによる福音書 21 章 36 節)

■ 2021 年 11 月 28 日 (日) 待降節第 1 主日礼拝 (典礼色：紫)

ルカによる福音書 21 章 25-36 節／説教「目を覚ましていなさい」(説教要旨)

教会の暦は、今日より「新年」を迎えます。装いを新たに「アドベント」の季節を迎えました。先週、2 年ぶりに「大掃除」を行い、クリスマスツリーやアドベントリース、オーナメントや飾り付けをし、典礼色は紫に変わりました。紫は、一つの意味は昔王様が身につけていた高貴な色です。王なるキリストが、私たちの世界を初めから終わりまで(先週の箇所ではアルファでありオメガである)関わってくださることに意識をむけます。同時に私たちは自らを顧み、罪を思い悔い改めていく期節の色なのです。



さて、今朝あたえられたルカによる福音書は、この世界の「終末」について語ります。不安や恐れ、気を失うなど天変地異による混乱です。私たちも今年、経験してきた災害や病などと重ねてイメージされる方もおられるでしょう。しかし、すべての事が起こるまでは、この時代は決して滅びず、イエスさまの言葉は決して滅びないと言われます。だから、気をつけて生きなくてはならないことがある、というのはいったい何でしょうか。

一つは、「人の子」が雲に乗ってくる、といます。なにやら不思議な表現ですが、「人の子」とは救い主イエス・キリストのことです。解放の 때가近いというのですから、この世界のあらゆる悲しみや苦しみ of 出来事から労を解かれていくのでしょうか。その時は、頭を上げて、空を見上げることをすすめています。人は危険を察知した時、目をつぶる人と見つめる人とに分かれるといわれます。たとえば自転車や車の運転中、何か目の前に飛び出してきた時です。もっとも良い対処は、冷静に状況を把握し、事態を捉えて危険を回避することです。このことを記したルカは、終末やその時の対処を語るのです。

ルカはこの福音書を紀元（西暦）80年代に書いたといわれます。70年にユダヤ戦争という戦いで礼拝にあずかっていた神殿は破壊つくされます。ユダヤの人々は抛り所を失い散り散りバラバラになりました。現在は西側の壁だけが「嘆きの壁」という名で残されていることご存知の方も多いことでしょう。ルカは戦争を経験し、生き残った人です。家族や友人の同胞たちもいたはずですが。その教訓を十数年後に書き記します。現代の私たちにおいても戦後、かつての対戦や動乱期を経て生き残った人の話を聞いています。その苦悩を語り部として伝える人もいます。ルカはその口伝を聞き、自分の信仰を通じて書き留めたのです。ユダヤ戦争後、イエスさまを信じていた人々は苦難の後、もうすぐ終末が来るものだと思っていたようです。けれども直ぐには来ませんでした。その結果、放縦（勝手、わがままの意）や深酒、生活の思い煩う人が周囲にでてきたのです。現実を見なくなったのです。けれども、そうであってはならない。心配な出来事はすべてが起こるまでは決して滅びない。聖書の御言葉は決して滅びない。終末は遅れているかもしれないが、戦乱の痛みを知った者同士が聖書の御言葉を聞きながら生きることをルカはすすめたのではないのでしょうか。

今年を振り返り、一つの災害を思い出します。夏に久留米市を襲った豪雨で床下、床上浸水に見舞われた世帯がありました。コロナ禍であっても同県内の移動までは可能でしたので、私もボランティアに参加しました。ある被害を受けたお宅に数人のメンバーと伺った際、お家の方とメンバーの一人が談笑していました。「うちは、これで3年連続4回目の床下、床上浸水ですよ」と事情を打ち明けると、「うちは、なんとか片付けが終わり、少しでも手伝いたいという思いで駆けつけてきました」との返答。じつはお二人とも被災者で、『3年連続4回目』なんて、甲子園出場やないのだから…」と、ユーモアを交え、笑みさえ浮かべながら再建に向かおうとしていたのです。当事者の苦しみは、最終的には本人同士しかわからない。だからこそ共にいることを選ぶ方の姿を学びました。

それは、ルカが後世に残すべく教訓を伝える姿に重なるのです。ルカは一節では「医者」だったといわれます。痛む患者に対して、いくら診察して治るという説得や処方箋を出したところで、患者が聞いて信じなければ効果は得られないことを知っていたはずですが。そうではなく、戦乱で辛酸をなめるように生き延びた同胞に接し、終末に備え、経験したからこそわかるという思いで福音書を認めたのではないのでしょうか。その信じるべき方こそ「人の子」イエスさまだということです。

「人の子」として生きるために、幼子イエスは誕生するのです。人の酸いも甘いも知る方が、同時に神の子として、私たちの罪を背負い贖うために十字架の死を遂げるのです。そして終末を見据えて世界の最後の最後まで、また私たちの一人ひとりの生涯の終わりまで共にいてくださる。私たちはルカによる福音書を紐解きながら（一年かけて読みすすめます）、イエス・キリストの前に立つことができるように目を開き現実を見ましょう。いつも目を覚まして祈る者に変えられていくことを期待しつつ、クリスマスを待ち望むのです。



.....

真理は私たちを自由にするとはい？

H・M

ルターでなくても宗教改革をしたらどう。この言葉は、多分、ルター本人もそう言ったのではないかと思う。ルターが証した信仰を見よ、という感じで。私ではなく、キリストを見るべきだと。そして、それによって自由を得るだろうと。確かに、ルターは人間的には決してお手本にはしてはいけないし、自分を偶像化することを拒む行動ばかりをしている。

自分自身の話をすれば、本当に長きに渡って精神が壊れた状態だった。それが若干マシになったもののまだまだ壊れている。この、若干マシになったというのは、おそらく、ルターが恵みの神を発見したことと、実は、重なっている。

ルターにとって神は、自らを罪人と認定する以外の何物でもなかった。そのように考えるのはおそらくは父親から相当の抑圧を受けていただろう。でなければ、神を裁く神としか捉えるということとはしない。だから、修道院に入ったのは、父親から逃げるためではないかと思っている。だが、そこで待っていたのは、先に述べたような裁く神でしかなかった。父親から逃げたはいいが、もっと厄介な問題を抱えることになってしまった。抑圧するものが父親から神になってしまったのだから、それは逃れようがない。さらに問題をややこしくしたのは、アリストテレスの論理学である。ルターの話をしているのに、アリストテレスが出てくるのは不思議かもしれないが、別に驚くほどのことでは無い。

なぜなら、ルターの教師としてのキャリアは、アリストテレスのニコマコス倫理学を教えることから始まっているからだ。ルターがアリストテレスの影響を受けていないはずがない。ではどうしてアリストテレスの論理学が話をややこしくしたのか。

アリストテレス以来の伝統的な論理学は「あるものがあるものであるのは、それが別のものではないから」という形で同一性を定義する。そこには排除の論理が潜んでいることになる。私が私であるのはあなたではないからだという形で、私の同一性が定義されるわけだ。これを神について当てはめると、とんでもないことになる。



神が神であるのは、人間ではないからであるし、人間が人間であるのは神ではないからである。神が義なるものであれば、必然的に人間は罪となる。したがって、神は裁く神以外の何物でもなくなるわけだ。そこからルターはどのように恵みの神を発見したのか。それはキリストという媒介者を通してである。

つまり、人間はキリストを通じて神との関係を取り結ぶ。十字架が神と人間との罪の関係の象徴ならば、復活は神と人間との愛の関係の象徴となる。このようにキリストを媒介とする関係によって、排除の同一性の論理は破壊されるのである。つまり、神と人間という関係は排除の二者の関係ではなく、三者の関係となるのである。そして、愛を象徴するものが聖霊だとするならば、我々は聖霊の愛の共同体によって生きることになる。

そして今、自分はその教会という愛の共同体の中に在る。排除の論理ではなく、愛の論理で結びついている共同体に対しては、最大の忠誠を尽くして生きることが可能である。そして、そこには確実に自由が存在する。私が私であるのはあなたではないからだ。だから、私が私であるのはあなたがあつてこそなのだ。このことに気が付いたとき、自分の気持ちは楽になった。クサイ言い方をすれば愛の中に生きているからだ。

.....

【お知らせ】



YouTube【ルーテル箱崎教会／聖ペテロ教会 YouTube】は、LIVE 配信（毎週日曜日 10 時 30 分～）ほか、「こどもへのおはなし」、「ルーテルはこぎき広場」（音楽の演奏）などを常時アップしています。ぜひ一度、ご覧ください。

